

Glocal Tenri



9

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.17 No.9 September 2016

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「公開教学講座」開講に寄せて
／高見宇造…………… 1
- ・ 天理教理史断章 (108)
北野文書⑩「おさしづ」の写し翻刻
／安井幹夫…………… 2
- ・ 『教祖伝』探究 (27)
村方
／深谷忠一…………… 4
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (29)
第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事
の学」④
／井上昭夫…………… 5
- ・ 「おふでさき」の標式的用法 (13)
「そうじ」について④
／深谷耕治…………… 6
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (19)
第1巻における「道」まとめ②
／澤井治郎…………… 7
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (41)
救済の多様性 生長の家⑤
／山田政信…………… 8
- ・ 地域福祉を拓く 一新たな寄付文化の創造
— (21)
義援金と支援金③
／渡辺一城…………… 9
- ・ 遺跡からのメッセージ (15)
イスラエルの遺跡調査① テル・レヘシュ
第10次発掘調査、始まる
／桑原久男…………… 10
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ
関係試論 (8)
地名を通して見る歴史
／森 洋明…………… 11
- ・ 現代宗教と女性 (10)
保守運動と男女共同参画の変質
／金子珠理…………… 12
- ・ 図書紹介 (97)
『近代仏教スタディーズ—仏教からみたも
うひとつの近代—』
／岡田正彦…………… 13
- ・ English Summary…………… 14
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 15
第292回研究報告会 (八木三郎)／第294回
研究報告会 (金子珠理)／平成28年度「公
開教学講座」のご案内

巻頭言

「公開教学講座」開講に寄せて

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

本誌既報の通り、平成28年度公開教学講座を9月より開講させていただきます。今回のテーマは「現代の事情に対する天理教の思案—教えと実践、天理教学からの視点—」と致しました。開催趣旨に記したように今日、私たちの生きるこの世界においては様々な問題が起きており、これらはまさに『現代の事情』として捉えることができます。社会全体の課題として取り組まなければならない“事情”であると同時に、お道の教理からしっかりと向き合い、思案していくことが求められています。

取り上げる問題は「超高齢社会—信仰とその取り組み」、「性的少数者とジェンダー—いちれつきょうだいを考える」、「無縁社会—一人とのつながりを再考する」、「都市化と過疎化—宗教浮動人口の行方」、「情報化社会—技術革新がもたらす社会生活の変化」、「再生可能エネルギー—火・水・風を生かした電力の再考」、「戦争—和睦なるよう」としました。いずれも信仰者にとって思案しなければならない大切な問題ですが、天理教学からはどのようなアプローチ、また展開が可能なのか、その思案にご期待をいただきたいと思っております。

ところで、敢えて「事情」という言葉を使いましたが、それは事情を通して親神の語りかけに心を澄まし、その思惑を悟らせていただきたいという私たちの信仰姿勢からです。

「おふでさき」に、「なにもかも月日しはいをするからハ をふきちいさいゆうでないぞや」(七号14)とあるように、これらの事情は大きな社会事象、社会の根幹に関わる問題として現れることもあれば、私たちの具体的な生活の中で感得されることもあるでしょう。しかし、どこまでも陽気ぐらしへの歩みを進める上で思案しなければならない課題とするのが私たちの立ち位置です。すなわち「おさしづ」に「尋ねた処たすけ一条の事情、所々国々遠く所までもたすけ一条で救ける救かる、

というは皆説いたる。」(明治27年7月30日)とあるように、どこまでも「たすけ一条の事情」として捉えることができればと思います。

例えば、私は今回、「超高齢社会」を担当しますが、当然、介護等を主とした福祉問題としての超高齢社会が関心事となります。これは誰も否定することは出来ません。しかしその前提としては、例えば「かりもの」の身体を長く使わせていただけたる今日の姿に感謝し、いかに陽気ぐらしに向かう道へとつなげるかという思案も大切な視点になります。そうした意味で教学としての関心事となるように考えてみたいと思っております。

副題には「教えと実践」としました。実践とは何かということになりますが、それは申すまでもなく布教・伝道であります。教えと信仰によって社会に何を発信していくことが出来るのかです。教学は現代社会に語りかける言葉を持たなければなりません。

ところで私は先日、日本ソーシャルワーカー学会の総会に出席しました。これは社会福祉の研究・実践を推し進める学会です。総会中、質疑の中であるパネラーが理論と実践の関係を論じる際に「往還」という言葉で説明をされました。私は思わずその発言に聞き入ってしまいました。今回の副題とした「教えと実践」もそうしたことが言えるのではないかと思ったからです。教えの理解が深まることによって実践が展開する、その実践を通してまた教えの理解が深まる。そうした相互の関係は、往還道の行き来に例えることができるのかもしれませんが。私は「これからハをくはんみちをつけかける せかいの心みないさめるで」(二号1)というお歌が思い浮かびました。今回の公開教学講座がそうした意味で「世界の心を勇める」取り組みになればと願っています。皆様のご来場を心よりお待ちしております。